

総論

満点	70点	目標得点	55点	試験時間	60分	偏差値	A:72 B:74
大問数	1	小問数	2				
〔解答形式〕		選択式	0/2問	記述式	0/2問	論述式	2/2問
〔問題難易度〕		C	1/2問	B	1/2問	A	0/2問
※問題難易度：C難問、B標準、A平易、を示す							

Topics

- 1：課題文を読解した上で、〔設問A〕と〔設問B〕の二つの大問に答える形式である。〔設問A〕は空欄補充問題。字数は400字以内。空欄の前後の文脈に合致した、適切と考えられる文章を自分で考えて記述することが求められている。〔設問B〕は論述問題。字数は200字以内。課題文の内容を理解した上で、指示に即した事例引用と説明が求められている。
- 2：課題文は、環境問題の解決に市場原理を利用して解決する方法の有効性について論じたもの。アメリカ政府が1990年の大気浄化法の改正で、指令統制方式から市場を用いた間接的な汚染コントロール方式に改めた結果、酸性雨の主要な原因となる二酸化硫黄の排出量を、従来より効果的に削減することに成功したという事例が紹介されている。
- 3：〔設問A〕＝読解・〔設問B〕＝論述・字数＝合計600字程度、が例年のパターン。今回の〔設問A〕は空欄補充の形式が用いられている点で特徴的だが、設問の指示を踏まえて課題文を注意深く読めば解答は導き出せる。〔設問B〕は具体例を挙げて論じる問題。字数は合計600字。以上から基本的には例年の出題傾向を踏襲したものと言える。課題文の内容は、ここ数年の中では比較的難度が高く、経済学に関する基礎的な知識がないと課題文も十分には読解ができない可能性がある。

こんな力が求められる！

- 1：慶應-経済学部の小論文は、以前は経済学とは直接関連しないテーマが出題されることもあったが、近年は経済学の関連分野からの出題が増えている。したがって基本的な経済に関する知識（『政治経済』の教科書レベル）は確認しておくことが望ましい。
- 2：課題文の正確な読解ができないと論述問題も解けず、全く手がつけられない場合がある。一定以上のレベルの課題文を正確に読みこなす練習をしておくことよ。そのためには、慶應-経済学部の過去問に限らず、慶應義塾大学他学部や他大学の小論文問題にも取り組んでおくことよ。多様なテーマや文体の文章に触れておくことが読解力向上の秘訣である。
- 3：慶應-経済学部の小論文で最も困難な課題は、60分という制限時間内に答案を完成させることだとも言える。600字をこの時間で書くというのは、高校生にとっては、事実上、下書きなしで簡単なメモを取る程度で、解答用紙にいきなり書かねばならないということだ。ゆえに、簡潔に分かりやすい文章を短時間でまとめる力が求められる。慶應-経済学部の過去問をはじめ、短字数型の小論文問題を短時間で書く練習をしておこう。

### 【設問A】

予想配点	40/70 点	時間配分の目安	40/60 分
字数	400 字以内	出題形式	課題文型
設問形式	論述式（空文補充）		
出典	ジョン・マクミラン著、龍澤弘和・木村友二訳 『市場を創るーバザールからネット取引まで』NTT出版（2007年）		
難易度	B ※問題難易度：C難問、B標準、A平易、を示す。		

●注目すべきポイント：以下、項目ごとにお茶ゼミ論文科の予想採点基準を提示する。

理解力：政府の指令統制による方法よりも、市場による方法の方が、二酸化硫黄の排出量削減のために有効に機能する理由が正確に読み取れているか。（30点相当）

設問には（Ⅰ）「汚染削減コストに関する官僚と企業の間での情報の差」と（Ⅱ）「汚染削減コストの正確な情報を伝える企業側の動機付け」に着目せよという指示があるので、この二つの項目ごとに述べる。

- （Ⅰ）政府の官僚： ①個々の工場の削減コストの高低を正確に把握することはできない  
②それゆえ、適切な排出基準を設定することが難しい。

市場による方法：③各工場は自身の削減コストを正確に把握できている

- ④それゆえ、自工場にとって適切な削減基準を設けることができる。  
⑤そして、結果として国全体の削減基準も適正化され得る。

（Ⅱ）政府の指令統制による方法：

- ⑥企業側は政府が決める排出基準を守る以上に汚染削減に努力するための動機付け（インセンティブ）がない。  
⑦それゆえ、汚染削減のための重い負担を避けるために、各企業は自身の汚染削減コストを適正值よりも高めに主張する傾向がある。

市場による方法：⑧汚染許容量基準を下回った分を販売して利益を得られる

- ⑨それゆえ、各企業は積極的に汚染排出量削減に取り組む。  
⑩また、こうして売買される排出許容量の平均価格から、汚染削減の正確なコストも客観的に明らかとなる。

※以上の①～⑩が正確に理解できているかどうか、対比が明確かどうかに応じて評価をする。A評価（28点）、B評価（22点）、C評価（16点）、D評価（10点）、E評価（4点）。（Ⅰ）か（Ⅱ）の一方の内容しか述べられていない場合は、最高でもD評価までとなる。C評価が標準。

表現力：高校生として当然求められるべき正確な表現（表記も含む）ができていないかどうかに応じて評する（10点相当）。A評価（9点）B評価（6点）C評価（3点）。B評価が標準。

補足：問題の対象となった空欄部分は、出典となった原著では、以下のようになっている。

「状況は企業ごとに異なっている。自らの環境、とりわけ汚染物質の削減コストがどれほどになるかを、もっともよく理解しているのは企業自身である。EPAが企業の削減コストを知ることができるのは、企業が情報を自発的に提供するときのみである。しかし指令統制のもとでは、インセンティブは逆に作用していた。経営者たちはEPAと交渉する際に、なるべく達成が容易な浄化目標が割り当てられるように、企業の削減コストを誇張するかもしれない。指令統制のもとでは、削減コストを知ろうとするインセンティブは殆どなかったため、経営者たちは削減コストがどれだけ低くなりうるかを知らない可能性さえあった。官僚が行う汚染コントロールは、情報の欠如によって妨げられていた。

これとは対照的に、市場のもとでは、情報をもっともよく知っている人々によって意思決定がなされている。行動は言葉よりも雄弁である。企業が市場で行うことは、企業が官僚に対して語るどんな言葉よりも、信頼できる情報を提供してくれる。浄化コストが低い企業には、自分がかつ許容量を販売することによってこの事実を明らかにする利潤ベースのインセンティブが作用するのである。」

## 【設問B】

予想配点	30/70 点	時間配分の目安	20/60 分
字数	200 字以内	出題形式	課題文型
設問形式	論述式	出典	設問Aに同じ
難易度	C	※問題難易度：C難問、B標準、A平易、を示す	

●**注目すべきポイント**：以下、項目ごとにお茶ゼミ論文科の予想採点基準を提示する。

**構成力**：答案全体の標準的論理構成として、以下の点を踏まえたものであること。(12点相当)

市場を用いて環境問題を解決する方法は、次の点を利用したものである。

- ①企業の第一目的は利潤追求である。
- ②企業が汚染削減によって適正な利益を得るには、汚染排出権の適正な市場取引が行われる必要がある。したがって、以上の①または②、あるいは①②の両方に対応しない汚染原因や汚染物質排出者による環境問題の場合には、市場を用いた環境対策では原理的に解決が難しいことになる。

※上記論理構成の整合性に応じて、A評価(10点)、B評価(7点)、C評価(4点)。B評価が標準。

**発想力**：具体的な例としては次のようなものが挙げられていること。ただし、

- ①いずれか一つを取り上げてあげればよく、すべてを列挙する必要はない。
- ②個別事件名・企業名などを記さなくてもよい(12点相当)。

**A 国営・公営企業による汚染**：民間企業と異なり利益追求の姿勢が希薄なため、市場原理を導入しても、増益のために有害物削減のために積極的に取り組むことが期待しにくい(①に対応)。

**B 独占・寡占企業による汚染**：独占・寡占企業の支配力が強く、汚染削減への取り組みが行われ難い。また仮に汚染削減への取り組みが行われたとしても、独占・寡占企業の市場への影響力が強く、排出権の自由な売買が行われにくいいため、十分な汚染削減効果が期待しにくい(②に対応)。

**C 個人による汚染**：観光地のごみ捨て問題のように、個人レベルのモラルの欠如が原因の場合にはそもそも市場原理を適用できない(①②に対応)。

※こうした内容の妥当性に応じて、A評価(10点)、B評価(6点)、C評価(3点)。B評価が標準。

**補足**：たとえば水俣病はチッソ(当時の社名は新日本窒素肥料)が水俣湾に有機水銀排水を無処理で排出したことが原因であることは既に1959年には実質上明らかとなっていたが、同社が有機水銀の排出を停止したのは1968年であった。これほど長い時間がかかったのは、水俣市が「チッソの城下町」と称されるほどチッソの水俣市や市民生活に対する経済的支配力が強大であったためでもある。以上のように考えれば水俣病の例は一応Bに当てはまるようにも見える。だが、当時は現代と異なり環境問題や企業責任に対する社会的な意識も低かったということも問題解決に時間がかかった大きな要因である。このように考えると完全にBに当てはまるというわけではないことが分かる。今回の設問はあくまでも現代の社会状況が前提となっているので、原則として時代背景が異なる事例を安易に当てはめても適切な解答にはならないと考えておこう。

**表現力**：高校生として当然求められるべき正確な表現(表記も含む)ができている(6点相当)。

A評価(5点)、B評価(3点)、C評価(1点)。B評価が標準。

**補足**：出典となった原著では、課題文に続く部分に以下のように記してある。

「排出量取引の成功は、どんな公害問題でも市場に任せることができることを意味しているのだろうか。そうではない。第1には、市場がうまく機能しないような状況が存在するし、そこでは指令統制が必要とされるからである。酸性雨は、他の形の汚染よりも解決が簡単である。二酸化硫黄排出権市場と同様の簡単さで市場を立ち上げることができるのは、汚染がどこで発生するかよりも、汚染の総量が重要な場合に限られる。単一企業が特定地域に損害を与えるような厳密に局地的な汚染のケースでは、排出量ライセンスを取引できる相手が存在しないので、排出量市場を創出することの意味がない。この場合には直接的規制が必要となる。第2には、二酸化硫黄のコントロールのように市場が機能するところでさえ、排出総量

# Benesse® お茶の水ゼミナール

の上限の設定や遵守の監視など、政府がリーダーシップを発揮し続けなければならないからである。」